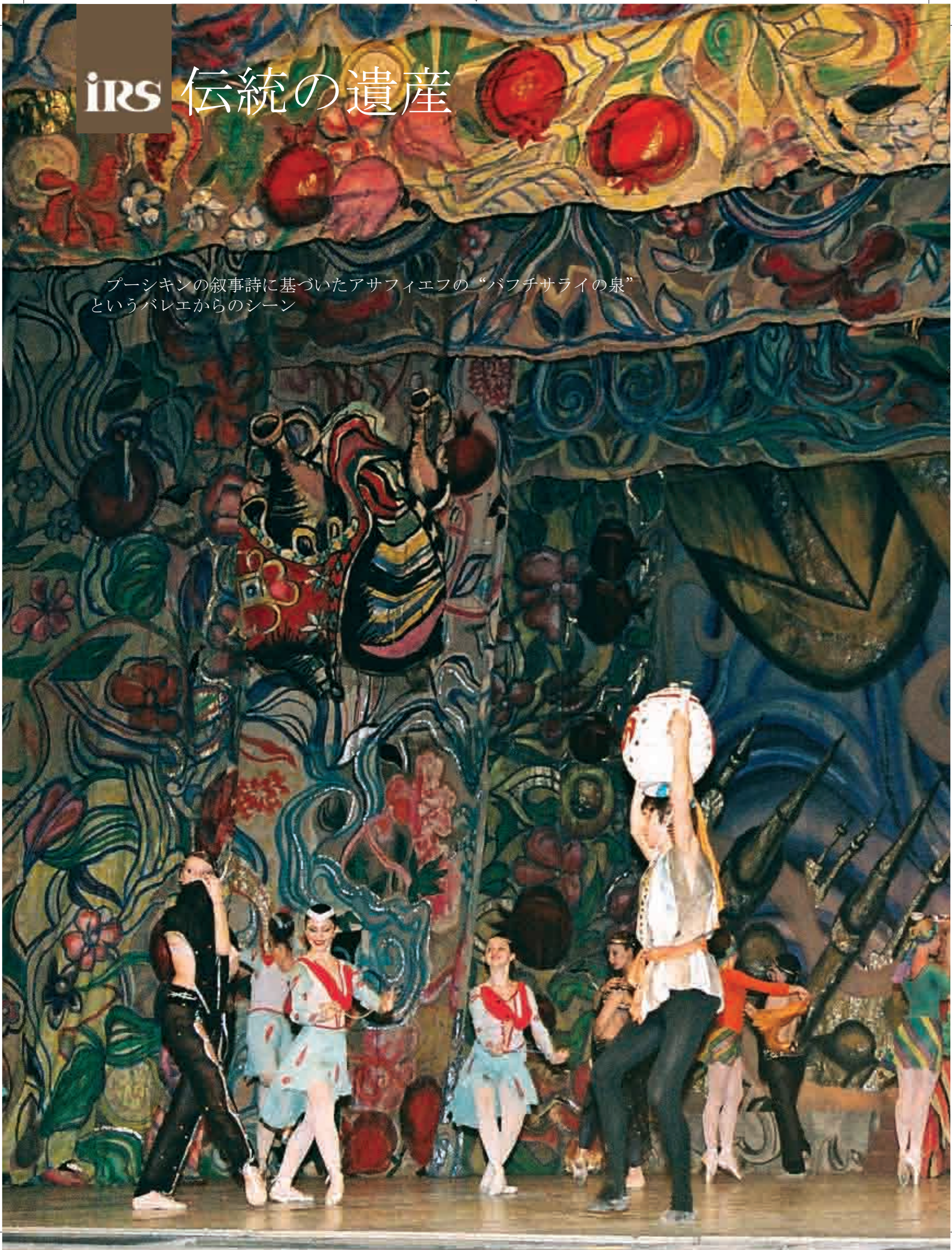


irs 伝統の遺産

プーシキンの叙事詩に基づいたアサフィエフの“バフチサライの泉”
というバレエからのシーン



ガリナ・ミケラゼ

アゼルバイジャンのバレエ — 根源と歴史行路



アゼルバイジャンの伝統文化の輝かしい成果はクラシックバレエのようなエリートな芸術の例で見ることができる。我々の国ではバレエが20世紀の20年代に生まれましたが、その成功は確かに古代史に生まれた、音楽性を持っている、客好きで感情的な民族の国民性のルーツと習慣のおかげである。

アゼルバイジャン民族の民間文化の大切に守られるサンプルが一カノニカルで、女性のみ演技されたエロチックで優雅な振付師を持っているダンス、或いは、情熱なマスダンスなしで行わない何の祭りも、プロのアンサンブルのレパートリーに入って、現代劇的なアクションの指定された形式になるのには何か将来の運命を決する重要なことがある。

19世紀後半プログレッシブ思考のメセナと国の文化の擁護者の努力のおかげで、いわゆる特有の演劇有機体が生まれ始めて、アマチュアと個人的な興行団がますますコンサート・プログラムや余興として演劇に扇動的なダンスを含めるようになった。非常に人気のある、可塑性、動きの多様性や感情が美妙的なこのダンスはオペラやドラマ上演を飾っていた。その他に、バレエステージの名人がした客演はバクー公衆の関心をクラシック振付師にも寄せることができた。この関心はだんだんプロになった新しいダンス集団の開始につながった。しかし、それは当たり前のことだったので。例えば、既に1910

年にヨーロッパの首都の例に従って、バクーでも石油採掘業者のマイロフ兄弟によって2000席のホールを持つオペラ・バレエ劇場が建てられた。この劇場は一定によく出演した客演俳優（世界的に有名な声楽家や器楽家、ロシア振り付け学校の優れた名人！



ガメル・アルマスザデ
ウゼイル・ガジベコフの
“ケルオグリー”というオペラ

）のおかげで芸術のことについて詳しく知っていた地元のインテリで埋まっていた。劇場で出来上がったバレエ興行団には挿話的に働いたモイセエフ、ノヴィコフ、アルバトフ、ヴィルスキイという著名なバレエの演出者が

“ジゼル”、“白鳥の

湖”、“眠れる森の美女”、“コッペリア”、“ラ・バヤデール”などのクラシックな興行の上演をしていた。バレエ興行団内に約40人が入っていて、主に、一つかそれ以上のシーズンにロシアから来た俳優から成っていた。そういうことは、もちろん、興行の質に影響を与えた。ところが、ゲルツァー、リューク、マクレツォヴァ、セメノヴァ、モルドキン、シャフロフ、セメノフなどというロシアステージの優れた名人の活動的な参加によっては若者の間にバレエを眺めるのみならず、自分自身もバレリーナとダンサーとして試してみる夢を与えられた。それ故に20年代前半にはバクーでバレエ研究所がいくつか開かれた。

そのうちに最も人気のある二つの研究所はダンス芸術の要素にかかわる初等科を前提して、そして、研究所の人々に希望を与えながら、数多くの戯曲、主題のミニチュアと上演に参加する機会を用いて引き付けた。ここで練習していた大勢は最終的にプロになることができた。多くの変更を施された末に、1923年から国民教育の指

プーシキンの叙事詩に基づいたアサフィエフの“バフチサライの泉”というバレエからのシーン



導の下に存在して、プロの先生を招待し、オペラ・バレエ劇場と密接に協力したバレエ研究所の一つは1930年にバクー舞踏学校に変換された。この舞踏学校こそその時ロシア劇場に真似る目的を超えない興行団のために人材育成の責任を引き受けた。しかし、時が来ればなるようになっていた。完全になりながら、アゼルバイジャンのバレエは文化の独立したユニットとして宣言され、50年代ごろ、好きな戯曲を何度も見て、意気込んで初演を期待したバクーの住民の巡礼地になった。

劇場に受けた最初のショックを今あったかのように覚えている。その時は、既に有名であったガメル・アルマサザデさんは胸を打たれる、のんきで気軽なマリアという若い令嬢で代表されて、“バフチサライの泉”の次のシーンにハーンギレイのハレムに捕虜になったドラマ女優として登場した。彼女の感情が全ホールに感動を与えるのに十分で、着席していた各にいわゆる劇場情景の捕虜と感じさせられました…バレエ劇場！

ではあるが、マリアはガメル・アルマサザデさんのバ

クーステージで間違えなく最初はおろか、唯一で華麗な役割ではないということだ。50年代に彼女に会ってから、私達は、ずっと以前から演劇が好きになって、劇場の大家との出会いから大多数の芸術的な印象を汲み取った観客の後任者だけになった。

今日は少女のガメルについての話は、隣人の劇場の管弦楽団員の娘、父親に“スポーツ”のためにもらった5コペイカを手に押さえながら、有料バレエ研究所に行ったシユラ・ステパノヴァの例のよ

うに、伝説に見える…アゼルバイジャンの最初のバレリーナになったガメルさんの履歴に関する事実が口から口へ伝えられている。そういうことは非常に当然で立派だ。なぜなら、この文化の種類の責任と感じて、熱心に、意気込んで精神性の空に光るために一生懸命頑張った彼女こそアゼルバイジャンバレエの形成の主要な功労が認められる。

バレエに愛着を覚えたガメルはバクー舞踏学校を卒業したやいなや最初はモスクワへ、しばらくして選んだ職業の知識を生かせるためにレニングラード舞踏学校へ通った。それに、あの時彼女はもうアフラシヤブ・バダベリという若い作曲家と結婚していて、両親もこいう勇気な決心に反対しませんでした。それにも何か将来の運命を決する重要なことがあるに違いな

い。

知られているのはガメル・アルマスザデさんが、偉人のガリナ・ウラノヴァの母であったマリア・ロマノヴァという素晴らしい先生のクラスに練習していたということである。しかし、だれも注意を払わなかったのは世界伝統を持つこの学校で彼女が自分をバレリーナになる人だけではなく、そこに満ちたうやうやしいと同時に古典舞踏に対して責任ある態度と創造的な精神のなしでならない偉大なバレエの雰囲気をもつこの学校で彼女が自分

をバレリーナになる人だけではなく、そこに満ちたうやうやしいと同時に古典舞踏に対して責任ある態度と創造的な精神のなしでならない偉大なバレエの雰囲気をもつこの学校で彼女が自分

さんと夫は素晴らしい構想を練って、ほぼできた戯曲をもってバクーに帰った。共著者のアゼルバイジャンの最初のバレリーナガメル・アルマスザデと音楽アフラシヤブ・バダベリの“乙女の塔”というこの戯曲はアゼルバイジャンの歴史に最初の国立バレエになることを運命づけられていた。

台本、国民精神、人民楽器の党の全譜表と同じ、人気ある伝統的ダンスがダンス党の振付師の模様を含めること…これすべて心を温められて、才能あるプロの名人知識、彼女の自分の能力に強くなった自信と最も大胆なアイデアを実現する可能性が使われていた。

1940年国立オペラ・バレエ劇場において初演を行った“乙女の塔”というバレエの生まれは実際にアゼルバイ



1936-1937年。ヤズビーンスキが男子教室で授業中



ジャンのバレエシーンの将来の運命を決する重要な動機となった。そして、ガメルさんの個人の性質すなわち良い教育、勉強中ロシアの振付師のエリートとの交際、大きい国民“あま布”の創造プロセスに参加などの事情は長年の間に世界舞踊学校の傾向に向かったアゼルバイジャン国立オペラ・バレエ劇場の興行団の指導者になることを可能にした。

もう1940年ごろにガメルさんはパートナーと一緒に世

界劇場でトップと認められる興行に鮮やかに主な役割を演じた。すなわち、“白鳥の湖”、“ライモンダ”、“赤いけしの花”、“ドン・キホーテ”などのようなバレエです。主要な振付師として国立オペラ・バレエ劇場の興行団の先頭に立って、彼女は長い37年にこの集団の発展の道を定義した。現在でもこの集団が活動的な創造人生を送っていることも彼女のおかげで、これからはめられた最も価値なものが守られ

る。

年々歳々バクー舞踏学校の卒業者に追加された劇場の興行団は50年代にレパートリーを広げるためにあらゆる機会を持って、次々と初演を迎えた。ここで同時にガメルさん積極的に芸術指導者として働いた。だんだんレパートリーの伝統的なエレメントに、グノーの“ファウスト”とボロディンの“イーゴリ公”というオペラを飾った“ワルプルギスの夜”と“だった人の踊り”のような華麗なバレエ

が追加された。大事な事件になったのはチャイコフスキーの“白鳥の湖”、“くるみ割りの人形”と“眠れる森の美人”という数多くの複雑な部分からなっている三つのバレエの上演、それ以上、ドリゴの“百万長者の道化師”と百年史を持つ世界名作であるアダンの“ジゼル”の上演ということである。

同時にダンサーのプロ成長過程の流れ中でした：必要事項を持つ各は自分を複雑なシーンに試してみる機会があった。そういうことは、創造的な環境を作って、最も有能なダンサーに発達することを可能にした。最もよいダンサーに負荷が増加するのは興行を“指導”する独唱者の演技技術のレベルが必ず国際基準に相当しなければならなかったからこそ。例えば、アルマスザデさんと共に多くの興行が才能あるバレリーナ、バクー舞踏学校の卒業者イリナ・ミハイリチェンコと将来にソ連人民芸術家になったレイラ・ワキロヴァによって上演された。モスクワでの教育を修了して、彼女は妙技の技術でみんなを驚かせるために旋風のように舞台に登場した。数十年でレイラ・ヴェキロヴァはすべての難しいパフォーマンスの演技者として有名になった。同期にバクー舞踏学校の中でガメルさんを職で芸



術指導者として代わって、新しく来る高級なバレリーナとダンサーを訓練した。

50年代にアゼルバイジャン人の最初のクラシックなプロダンサーはマクスド・マメドヴだった。ユニークな天才と勤勉のおかげでこの人は自分興行団に主役俳優になれて、海外で首尾よく有名なロシアのバレリーナとペアで上演することができた。

アゼルバイジャンバレエの未曾有の繁栄の時代は前世紀の50-70年代だった。その時バクーの舞台にガメル・アルマスザデ、レイラ・ヴェキロヴァ、イリナ・ミハイリチェンコ、ラフィガ・アフンドヴァ、エレナ・ブトニナ、ワーワラ・リジョヴァ、ビクトリヤ・ダンケビチ、ワレンチナ・ビガント、タミラ・マメドヴァ、ラヤ・イスマイロ

ヴァ、ワレンチナ・レンスカヤ、エラ・アルマゾヴァ、リュドミラ・パヴリイ、シマ・フェーズラエヴァ、ユラナ・アリキシザデ、ラリサ・エゴロヴァ、スベトラナ・ブルラコヴァ、及び男性のコンスタンチン・バタショフ、ユリー・クズネツォフ、ニコライ・クズネツォフ、マクスド・マメドフ、ドンマズ・ガジェフ、アナトリー・ウーワレンセフ、ミハイル・ガフリコフ、トフィク・マメドフ、ハヤム・カラントーロフ、ウラジーミル・ベズルコフ、カール・リュミン、セルゲイ・ボグダーノフなどが輝いていた。

こうなっては、俳優の数が増加したおかげで、舞台上で優雅で手間のかかるクラシックの演出が可能になった。新しくできた各興行はバクー住民

にとって祭りのようになり、劇場のホールも週末だけではなく、平日でも相変わらず埋まっていた。興味、観客の崇拜は俳優の自分に対してもっと高い要求性を生まれた動機の促進となった。

歴史水準ではこれが繁栄の始まりだけであった。アゼルバイジャン文化の目立った現象となるにしたがって、バレエは世界最高の作曲家の注意を引かれた。それで、アゼルバイジャン自信のバレエ作品が生まれて、時間がたつと共に国境外でも好評を博した。

アゼルバイジャン舞台にどっと流れ出した興行の数を数え上げるのは難しい。ただ明るくて、美しいだけではなく、哲学的に賢明だし、ロマンチックにライトアップされたカラ・カラエフの“七美人”と“雷の道”、ソルタン・ガジベコフの“ギュルシヤン”、アリフ・メリコフの“愛の伝説”…流行に貢物のように一幕のバキハノフ“カスピのバラード”、ファラジ・カラエフの“コビスタンの影”と“万華鏡”、カラ・カラエフの同名の交響詩の音楽で“レイリとメジヌン”、ニヤジの“チトラ”、“ナシミ”、“シュール”、“ムゲーム”、アミロフの“千夜一夜物語”、アバソフ“髪黒い少女”、ゼイドマンの“金の鍵”、ワインシテインの“

靈感”、アリザデの“バベーク”…

50-80年代に動き、音声、性格、思考、感情の万華鏡である、同国人に美しさの世界を紹介され、もっと清く、親切、デリケートになるのを促進させる前述の興行が次々と上演された。

1960年代半ば、我々のバレエでは自分のスターが現れた。チムナズ・ババエヴァ、タミラ・シラリーエヴァ、オ



ガメル・アルマスザデ。
教え子のために興行の上演

リガ・モチャコヴァ、イリナ・ニザメジーノヴァ、リュドミラ・レチャギナ、ウラジーミル・プレトネーフ、ルファート・ゼイナロフ、ラマザン・アリフリン、グラム・ポラトハーノフ、ビタリイ・アフンドフなどの舞台に立つにつれて興行団が“レ・シルフィード”、“交響曲”、“令嬢とフリーガン”、最後に“スパルタクス”のようなバレ

エを上演することができた。外国人の同僚に負けないで、アゼルバイジャンの名人は技術的な困難さと俳優課題をうまく処理できた。

本当の凱旋はモスクワ、レニングラード、キエフ、ミンスク、トビリシ、タシケント、ゴーリキー、ロストフ、サラトフで客演と個別の本国のバレエの出演となった。アゼルバイジャンのバレエは二回もフランスで自分のパフォーマンスを展示して、パリのフォーラムに参加して、パリダンスアカデミーの賞状を受賞した。

国立バレエは今どうやって活動するのか次号で掲載している…

この記事はアゼルバイジャンバレエ文化の歴史について述べている。記事の著者はアゼルバイジャンのバレエはたとえロシアとヨーロッパのバレエの影響で生まれ、発展されても、伝統的なダンス民間伝承に与えられたと知っている。主要なことは国立プロバレエの創立者、アゼルバイジャンの最初のバレリーナであるガメル・アルマスザデの活動に払われている。又は、著者がカラ・カラエフ、フィキレット・アミロフ、アリフ・メリコフによって作曲されたアゼルバイジャンバレエの重要な作品と共に偉いダンサーを指摘している。◆